

即興で歌を詠む！

いにしへの 奈良の都の 八重ざくら 今日九重に 匂ひぬるかな

伊勢大輔

訳：古都の奈良の八重桜が、今日はこの平安の都の宮中で美しく咲いているなあ。

作者の伊勢大輔は、一条天皇の中宮彰子に仕えていた宮廷女房です。ある時、一条天皇のもとに、古都である奈良から八重桜が届きました。当時、贈物を取り次ぐ係は、同じく彰子に仕えていた紫式部でしたが、新入りの女房であった伊勢大輔にその役目を譲りました。その際、彰子の父である藤原道長から、八重桜に添える和歌を詠むように要請され、その場ですぐにこの歌を詠み、見事初めての大役を果たしたといわれています。

「九重」とは宮中の意味です。八重桜の「八重」と対比して「九重」という数字を用いています。また「今日」には「京」の意味が重ねられ、今日栄えている京の都を賛美する気持ちが込められています。古語の「匂ひ」は嗅覚ではなく、「輝くように美しい」という視覚的意味です。とても華やかな歌ですね。

小野田高等学校小倉百人一首かるた部顧問 青池のぞみ